

## 2007年度秋季研究発表会

### レジュメ

#### 書評：『Androgynie und Inzest in der Literatur um 1900』

高橋 喜郎

人間は、真実よりも奇異な物語に惹かれるようだ。このことは、今の世に限られているわけではない。トラークルに関しても、妹のグレーテとの近親相姦を実証する証拠は、何一つ存在しない。しかしオットー・バーゼルをはじめ、多くのトラークル研究家は、証拠が故意に隠滅されたと考えている。ザルツブルクに関する写真集、トラークルの登場する映画、トラークルの母を主人公にした小説において、トラークルと妹との近親相姦が描かれている。それ程までに、二人の異質な関係は、人々の注目を浴びている。

ヴァイクセルバウムは、研究者だけでなく、一般の人々もこの詩人と妹の近親相姦を既成の事実と捉えていることに深い憂慮を感じている。この論集は、詩人と妹との近親相姦を事実とする見方に反論を提示する目的で編集されている。この論集には、トラークルに関する四編の論文の他、エルゼ・ラスカー-シューラー、ルー・ザロメ、ハンス・カルトネーカー、ローベルト・ムジル、トーマス・マンとヴァーグナーについても論じられている。この論集の読者は、「両性具有と近親相姦」がトラークルの生きていた時代に、大流行していたことを読み取れる。

ヴァイクセルバウムは、トラークルの作品における「兄妹相姦」も事実ではなく、詩人の空想による産物と結論付けている。

しかし、詩人と妹との異常な関係を暗示するものは、作品に限らない。これも直接的な証拠とは言い難いが、一つ挙げてみる。1908年の夏、ウィーンへ旅立つトラークルが妹にフロベールの『ボヴァリー夫人』を贈っている。その本には、詩人の自筆で次のような献辞が記されている。「千一夜物語の最も甘美で最も深遠なメールヒェンから立ち現われた、僕の小さな魔神 (Dämon) に」。恐らく、トラークルが念頭においていたのは、『最初の乞食のお話』であろう。その話の中では、地下の秘密の場所で、妹と例の行為の最中を従兄弟に発見された若者が、怒り狂った従兄弟に焼き殺されてしまうのである。

詩人が妹と近親相姦のあったことを完全に否定することは、多くの状況証拠の存在から、困難であろう。しかし、詩人と妹との関係が常習的なものだったのか、断続的なものだったのか、数えられるほど限定的なものだったのかも、また断定し難い。

ヴァイクセルバウムが、トラークルという名称と近親相姦が、ほとんど同義的に解釈されている昨今に、「反対」の一石を投じたことの意義は大きい。

## <旅行記>

# トラークルのザルツブルク・インスブルック

保坂 直之

2005年夏と2007年の春先にザルツブルクとインスブルックを訪問した。もともとはミュンヘンのゲーテ・インスティトゥートで教授法のゼミナールに参加するための渡欧だったが、折を見てはトラークルにかかわる場所を大急ぎで、足を棒にして確認して回った。

印象を連ねただけの旅の記録だが、たとえば次に **Traklhaus** を訪れる人の参考になればと思っている。

## 1 山

ザルツブルクはザルツァッハ川を挟んで北側の新市街、南側の旧市街に分かれている。旧市街を大司教の要塞に向かって歩けば、すぐにメンヒスベルクの岩壁に行き当たる。

メンヒスベルクは、山や丘というよりも街の南西を延々と塞ぐ法外に大きく、厚みのある市壁のようだ。祝祭劇場近くにトンネルが空けてあるが、バスの交通網のほとんどは18世紀半ばに作られたというこの長い通路ではなく、メンヒスベルクの壁面に沿って左右に迂回して、岩山の裏側にも広がる市街地に向かう。

ちなみにこのトンネルは単なる穿たれた近道ではなく、まさしく市壁に開いた出入り口＝市門 (Tor) に相当するので、**Siegmundstunnel** ではなく、**Siegmundstor** と呼ばれ、旧市街側の入り口は対のオベリスクで飾られている (★写真1)。

崖を登る階段を探して上まで登り詰めると、平らで奥行きのある台地に薄暗い森がどこまでも広がる。トラークルが日暮れ時に歩き回ったであろう冷んやりした遊歩道が、城塞の一部である石壁や門、古い貯蔵庫のような建物などの構造物をつないでいる。オーク (Eiche) などの落葉の高木が多く、寒い時節にはかなり寂しげな風景である。

普通の観光であれば、メンヒスベルク山上にはホーエンザルツブルク城塞に直登するケーブルカーか、岩山をくりぬいたエレベーター (Lift) で登るはずだ。Lift の乗り場はゲトライデガッセの西の端近くにある。エレベーターを登りきったところにある近代美術館は2004年完成のほぼ新築の建物だが、リフトの歴史は古いようで、切符を売るおじいさんに聞くと1892年に出来上がったケーブルカーとほぼ同時期だそうだ。1892年というのはトラークルが5歳のときだ。

ザルツブルク市中のもう一つの山、カプツィーナベルクはメンヒスベルクと向かい合うよ

うにして新市街側にある。高さも同じほどなので、いずれもザルツァッハ川に侵食されて残った丘陵の一部であろう。

山の登り口は二箇所あり、一つは商店が立ち並ぶリンツ通り (Linzer Gasse) の、トラークルがギムナジウムを辞めた後勤めた「天使薬局」の近くにある。この登り口は建物の裏庭に回るための小門のようにも見えるが、潜り抜けると山の壁に沿って左に迂回して、石段が整えられた上り坂が延々と続く。手すり越しにザルツブルクの旧市街、メンヒスベルクなどがよく見えて大変眺望がいい。

山はゴルゴタの丘に見立てられているらしく、登山道、というより山頂の修道院に至る参道に沿って、イエスの受難物語に題を取った像が並べられている。新約聖書の物語を追いながら山頂に着くと、十字架に掛けられたイエス・キリストに迎えられる、という趣向である (★写真2)。

ゆっくり登っても 20 分を要しない距離なので、ザルツブルク市民にとっては丁度よい散歩のコースとも思えるが、受難物語の彫像の描写が生々しいので、明るい散歩道では到底ない。

もう一つの上り口は、リンツァー・ガッセの入り口からやや右に折れたシュタインガッセ (Steingasse) にひっそりとある。坂のとっつきに茨を額に巻かれたイエスの磔刑像が飾られている (★写真3)。この像も力なく落ちそうな首、わき腹の傷からほとぼしる血の描写などがさらに生々しい。

トラークルの家から川に出てすぐにモーツァルト橋を渡れば、こちらの上り口までは 10 分もかからない距離である。この距離を体感すると、ザルツブルクという街は美しいが小さく、トラークルの行動圏は小さく限られているような印象にとらわれる。

...

ザルツブルクからインスブルックまでの鉄路は、オイロシティ特急を利用すれば 2 時間ほどの旅である。ザルツブルクを出てすぐにドイツ領内に入り、ミュンヘンに向かう幹線路を途中南に折れてチロルの谷に入っていくと、雪の似合う岩山が次々と車窓に近づいてくる。

インスブルックの市街を取り囲む山々は、ザルツブルク市に接する丘陵状のそれとは異なり、天に向かって上へ、上へと伸びていく壁のような様相である (★写真4)。イン川に沿った大通りから山側にそれると、すぐに急な斜面が始まる。色とりどりの家屋が急峻な階段状に整然と並ぶ景色だ。3 月の訪問時は到着した日から大雪だったので、雪の石畳の坂を歩くのに大変難儀した。

フランクフルト、インスブルック間の空路も利用したが、頼りなげなボンバルディア機が稜線よりも低い位置の谷の中をゆらゆらと飛ぶ風情である。晴れの日には眺めがいいが、荒天でひどく揺れているときは少し心細い。

その荒天の中でも国際線扱いなのか、軽食だが機内食がサービスされる。望めばワインも飲めた模様。乗客はみなプロペラの轟音の中、大変美味なデザートを着陸 8 分前にきちんと食べ終え、雪のチロル谷にびたりと着陸した。

## 2 教会

ザンクト・セバスチャン教会は先述のカプツィーナベルクの上り口の近くのリンツ通り沿いにある。モーツァルトの父や妻・コンスタンツェの墓所がある観光目的地のようだが、自分の目的はこの教会のどこかにある、トラークルの2番目の詩集のタイトルとなった聖セバスチャンの像を確認することである。

それは往来に面した教会の壁面にあった。杭に縛られ、数本の矢で射抜かれているが、カプツィーナベルクの上り口にあるイエス像のような苦しい姿ではない。伝説ではセバスティアヌスはハリネズミのようになりながらも矢傷では死ななかったことになっている。トラークルが見たであろうこのレリーフでは、足元に二人の小さな天使がいて、セバスティアヌスの太ももに刺さった矢を引き抜こうとしている(★写真5)。

街路を川のほうに戻ると、すぐに「天使薬局」がある。現在の店は実際にトラークルが働いていた建物の隣に移転したものとのこと。ここにも詩碑があり、セバスティアン詩集の詩群、「離別するものへ」に収められていた „Im Dunkel“ を読むことが出来るが、必ずしもザルツブルク市街の思い出に根ざした詩ではないことが面白い(★写真6)。

橋を渡って旧市街に入り、メンヒスベルクの岩壁の真下にあるザンクト・ペーターズ教会を目指す。付属の墓地に、トラークルの詩 „St.-Peters-Friedhof“ の詩碑が置かれている。教会の敷地に立つと、この詩がトラークルでは珍しく、山の岩肌や青白い花、アーチ柱廊などの様子を忠実にスケッチしていることがわかる(★写真7)。墓所の土は黒く湿っていて、墓地によく見られるベゴニアの花が目立った。

観光客向けの料金所があり、石段を登ってメンヒスベルクの壁に横穴を開けたカタコンベを見学できるようになっている。

ところで、トラークルの家はプロテスタントだった。洗礼を受けた福音派教会は、彼の生家からザルツァッハ川を渡って川岸を少し北上したあたりにある。教会正面から少し歩けば、すぐにミラベル庭園の西の端にある「小人の庭」の横合いに入れる。

## 3 庭園

鉄道の駅を起点にした場合、ミラベル宮殿は市街中心部の入り口あたりに位置する。駅から歩いて20分くらいの距離だ。17世紀の始め、大司教ディートリヒが愛人のために建てたと言われる宮殿の名を「ミラベル」に改めたのは、ディートリヒを継いだ従兄弟のマルクス・シティクスである。シティクスは後述する離宮をヘルブルンに造らせた大司教である。

ミラベルの建物を設計したツッカーは、トラークルの生家のあるレジデンツ広場の設計者でもある。ミラベル宮殿の裏手にはバロックの建築家・エルラッハが設計した庭園がある。庭園

にはギリシアの神々の大理石像が整然と並び(★写真8)、ホーエンザルツブルク城を背景としてとりこむ計算の造景がなされているようだ。

中央の噴水脇にある「バロック美術館」という小さな美術館の近くに、„Musik im Mirabell“の詩碑がある。トラークルのこの詩での「音楽」は優雅な気配を主意とする比喻の話か、あるいは妹のグレーテが弾くピアノの残響のようだが、ミラベル宮殿やバロック美術館では毎日のように実際の音楽会を楽しめるようだ。

庭園といえばトラークルの詩にはヘルブルン宮殿が登場する。3月の訪問時は雪もやんだ気持ちのいい晴天だったので、徒歩で距離感を確かめたく、レジデント広場にあるトラークル行きつけのMorawitz書店で詳しい地図を買ったが、かなりの距離がありそうだ。市外を延々と地図をたどっていくのは心もとなくなったので、25番のバスを利用した。この路線はトラークルの生家近くの川沿いのバス停にも停車する。昼下がりの時間帯で、乗客の大半はヘッドフォンを耳に入れて早口に喋っている高校生たちだ。

„Hellbrunn“の停留所を降りて黄色い壁に沿って行くと、宮殿の入り口に到達する。壁と同じ鮮やかな黄色のルネサンス様式の城は瀟洒な印象である。その南側に、有名な仕掛け噴水の庭とは別の庭園がある。

柘植の植え込みで幾何学模様を描いた庭園を囲むようにして大きな池があり、その左右に小さな池がある。南側の池の傍らに小さな建物があり、壁面に„Die drei Teiche in Hellbrunn“の詩碑がある(★写真9)。浅い池の中で、ほら貝を啜えたトリトンらしき像が二対、跪いて距離を隔てて向かい合っている(★写真10)。

「三つの池」の詩では、トリトンが複数形であることが印象的である。この池の向かい合う石像を描いたのであれば、先述の„St. Peters-Friedhof“の詩と同様、トラークルの意外な写実意識を垣間見るような気になる。Zypressenの語を刻んだ詩碑の傍らには傾いたヒマラヤ杉があるが、幹の太さからしてそれほど古い樹ではないのかもしれない。

詩にはオルフォイスがリフレインされて登場するが、オルフォイス像のある洞窟(Grotte)は、有名な「水仕掛け(Wasserspiel)」のツアーコースに管理された垣根の向こう側にあつて、池の庭園からは入れない。こうした仕切りがトラークルの時代にもなされていたかは確認できなかったが、O. Basilによれば、しばしば夜にトラークルは城の庭園に忍び込んだ。人のいない月夜であれば、石像の生命感も相当に増していたことだろう。そのまま夜を庭園で過ごし、翌日夢から覚めぬ面持ちで薬局「白い天使」に出勤した<sup>1</sup>。

トラークルによる夜のヘルブルンと、昼の、特に明るい夏のヘルブルンとはことさらに大きな違いがある。つまり、「水仕掛け」のことだが、一般にザルツブルクからヘルブルンへ足を伸ばす、というのは大司教が仕組んだ仕込み噴水に驚愕するためであろう。料金所で申し込むとFührungの時間が案内される。私はイタリア人の小学生の遠足の一行と一緒に。ザルツブルクにしても、インスブルックにしても、ともかくイタリアからの旅行者が多い。

<sup>1</sup> O. Basil: Georg Trakl mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1965, S. 57.

20人ほどの集団で、案内を聞きながら園内を見て周り、大司教が来客にワインを振舞おうとした、というテラスにある石のテーブルに着席する。ガイドの男性はすっかりマルクス・シテイクスになりきり、言葉巧みに小学生たちの両手をテーブルの上に寄せさせる。その瞬間に四方八方から水の噴水がいつせいにほとぼしり、みんな大笑い、だまされて濡れた小学生たちも大喜び（★写真 11）。

この水仕掛けが見学路、石造を飾った洞窟などのいたるところに隠されていて、カメラを気遣って息が抜けない。ガイドブックなどにも写真が載っているが、鹿の像の角の先端からも水鉄砲が噴出すので恐れ入る。

イタリア語とドイツ語を往復しながら巧みに案内してくれたガイドの人はアジア系に見えたので、どちらから、とたずねてみたところ南アフリカだという。ヨーロッパに長く暮らすと民族の違いは洗い流されてしまうのだろうか。もっとも、それなりのドイツ語を巧みに話せる、というのが条件なのだろうが。

水の庭園は古くから一般の人にも開放されていたらしい。19世紀半ばの記録で、近隣の男女が庭園に遊びに来て、水仕掛けのことを知らなかった女性たちを仕掛けの管理人と男たちが示し合わせてからかうさまが書き残されている<sup>2</sup>。交通手段としては、1886年に蒸気機関のトラムでザルツブルク市街とつながり、1909年には電化される。第1次大戦後は庭園、宮殿は市の所有となり、観光地としてさらに整備される<sup>3</sup>。

ヘルブルン宮殿の裏手の山（Hellbrunner Berg）に沿って、アニフに続く旧道がある。この山は小さな動物園になっているようで、古い石垣で取り囲まれている。道は壁に沿って、山の急斜面の岩肌を眺めながらのどかに続いている（★写真 12）。アニフまでは30分ほどの距離だが、若いトラークルには丁度よい散策のコースだっただろう。

アニフには„Verlassenheit“で描かれたアニフ城があるが、敷地には入れず、道路脇の鉄門の隙間から垣間見ることができるだけである。村の観光案内のパンフレットにも城の写真があったが、これも扉の外からの垣間見の写真であることに大変驚いた。

#### 4 トラークルの生家

伝記によればトラークルが生まれた家は Waagplatz 2（現在の住居表示では 1a）にあった。6歳の時にモーツァルト広場に面した広い家に移ったという<sup>4</sup>。住所の表記は変わるが、この二つの建物は街路を隔ててほぼはす向かい、という位置関係である。

トラークルが幼年期、少年期を過ごした新しい家は、改修されてカフェになっている。正面に広場のモーツァルト像、家の南側の窓からはレジデンツ広場と噴水、大聖堂が眺められたは

<sup>2</sup> Hellbrunn. Schloss, Park und Wasserspiele. 1 Auflage im März 2004, S. 7.

<sup>3</sup> Ebd., S. 55.

<sup>4</sup> H. Weichselbaum: Georg Trakl. Eine Biographie mit Bildern, Texten und Dokumenten. Salzburg 1994, S. 19ff.

ずだ(★写真13)。まさしく市街の中心、一等地であり、家業が上向いての転居であった、という説明がよく理解できる。

古い生家は市が管理していて、平日であれば部屋を見学可能である(ガイドつき見学のみのような)。建物の半分はモダンアートのギャラリーになっているようだ。住所は **Waagplatz** だが、実際は川沿いの道にも接していて、川に沿って残る市壁の間近に建っている。

呼び鈴を押すと、職員の女性が出て、急いで入ってくれ、と言う。小学生の団体への案内が始まったばかりだからだ。近隣から社会科見学に来た、という風情の、日本で言えば5年生くらいの子供たちである。面白いのは一通りの説明が終わって、トラークルの生涯を紹介する短いビデオが上映される段になると、みな急にそわそわし始めて、誰も聞いていない、見ていない、中には眠りそうになる子供もいる。引率の先生が青くなって注意している。「文学」が退屈で意味不明の何か、になっているのは洋の東西を問わないらしい。

研究資料を並べた書棚を説明するときに、係の女性が、日本から寄贈された資料もあるんだ、と誇らしげに小学生たちに説明していた。

この住まいの中庭は薄暗く、あまり陽が差さない(★写真14)。子供たちが遊ぶ場所を確保するという意味もあって、トラークル家は **Pfeifergasse** の庭園を手に入れたらしい<sup>5</sup>。モーツァルト広場を横切ったあたりである。トラークルの詩にもしばしば登場するこの庭園は現在も残っているようだが、私有地で立ち入ることはできないようだ。写真で見る限り、立派な東屋もあり、それ相応に広い敷地のようだ<sup>6</sup>。

悪くない暮らし向きであるがゆえに、ギムナジウムの課程を中断して見習いの実務につくことには挫折感が伴ったと推察できる。自分の場合には川沿いの市壁を観察したい気持ちもあって、ついモーツァルト橋(★写真15)を渡ることも多かったが、リンツァー通りの薬局に通うのには **Judengasse** を抜けて大きなシュターツ橋を渡る方が近かっただろう<sup>7</sup>。**Staatsbrücke** は古くからの町の中心の橋だが、**Mozartsteg** はギムナジウムをやめる2年前の1903の完成で、トラークルにとっては真新しい経路だったはずだ。

橋といえばトラークル橋(**Traklsteg**)という橋があった。ザルツァッハ川を下って鉄道の鉄橋をくぐり、物理学者のドップラーの名を冠したギムナジウムのあたりにある。アールヌーボーのオーナメントも美しいモーツァルト橋とは異なり、実用的な鉄の小橋だ(★写真16)。インフォメーションで無償配布される観光市街地図にも乗らない、中心から遠く離れた町外れに置かれていることがなんとなく寂しい。もちろん散策を好むトラークルはザルツァッハ川に沿って市街の北のはずれの **Maria Plain** の城まで足を伸ばしたということだから<sup>8</sup>、この場所も彼の生活圏の中にあるのだが。

トラークル橋を渡って新市街側を川に沿って鉄道の橋まで戻ると、**„Vorstadt im Föhn“** に

<sup>5</sup> Ebd., S. 21f.

<sup>6</sup> Ebd., S. 22.

<sup>7</sup> Ebd., S. 52.

<sup>8</sup> O. Basil, a. a. O., S. 59.

登場する屠殺場だった場所に出る。現在は地域暖房の中央熱源施設になっている。

## 5 雪の大学、夏の水浴

インスブルックに出かけたのは、大学付属のブレンナー資料研究所 (Forschungsinstitut Brenner-Archiv) で資料を探させてもらうためだ。3月も末だというのに、雪が降り積もっているのには驚いた。

「二三日で溶けてまた歩きやすくなるよ、その後また降るだろうけど、それがチロルでは普通なんだ、ずっと溶けないということはない」と、民宿の主人が慰めてくれたが…。

歩きにくいのが、雪をかぶっている町並み、山並みは喻えようもなく美しい。

大学のある場所はすぐにわかるが、Institut の場所を探すのは思いのほか難しかった。行き会う学生や職員に聞いてみても、総合大学で自分とは無関係の研究室であれば、考えてみればわからないのが当然である。そもそも住所の Josef Hirn-Straße というのが地図に出ていないほどの小さな通りらしい。

中央図書館で聞いても誰もわからなかったのには少し驚いたが、中央研究棟に上って「人文科学研究所」の図書室で、やっと知っている人がいた。

イン川に沿って地下道を抜ける近道を教えてもらい、やや疲労してたどり着く。湿った雪で傘が濡れて重い。大学というより、街中にあるモダンなビルを買い取って研究施設にしている、といったたまたまいだ。ヨーロッパの建物の内装、構造、調度というものがきちんとデザインされているのにはいつもながら感心する。どこもかしこも物置小屋のようになってしまう日本の研究室とはずいぶん違う。

資料を書庫に一元管理しているためだろうが、ガラス張りの研究室は物が少なくて仕事しやすそうである。Sauermann 氏を除いては Professor 達は不在だったが、資料室では若い学生達が楽しそうに働いている。廊下の部分を広げて小さなホールにしてあり、椅子を配置して少々の講演会などができるようになっているようだ。

三日間、コピー機と書庫の間を行き来している間に雪はほぼ溶けた。

インスブルックはトラークルが『ブレンナー』誌の同人と交流した街である。行きつけのカフェ、ワイン酒場などが旧市街のあちこちにあったはずだ。アニヒ通りとマリア・テレジア通りの接点にあったブレンナー関係者の溜まり場の Cafe Maximilian は、Cafe Sir Max と名前が変わっているようだ。

もちろんインスブルックも歴史のある観光地なので、「宮廷教会」、マキシミリアン皇帝の「金の小屋根」、ゲーテゆかりのホテルなど、名所には事欠かないが、トラークルの詩に登場するのはイグルス (Igls) やランス (Lans) といった市の中心域の外、郊外の地名である。おそらく散策には好都合の場所であったはずだ。

イグルスに行くのにはいろいろな方法があるようで、地元の人もどの方法を教えようか迷う



らしい。J のバス（バスは番号ではなくアルファベートを割り振られている）に乗って直通で行くのが最も簡単だろう。旧市街中心の **Marktplatz** で乗車できるが、バス停としては同じ **Marktplatz** という名前でも、路線によって停留所が非常に広範囲に散らばっている。インレインという大きな道路の中央にあるバスターミナルとは離れた位置に停まるので、その場所を探す必要があるだろう。親切な市民が多いが、バス停一つとっても自分と関係のないバス停であれば見当もつかないのが普通のように、知っている人に出くわすまで気長に声を掛ける必要があるようだ。

もう一つの経路は山越えの小さな鉄道を利用するもので、こちらのほうが旅としては楽しい。ベルクイーゼル (**Bergisel**) というのが山越えの路線の始発駅にあたり、市中からトラムを使って、**Stiftkirche Wilten** という教会を目印に、近くで降りて乗り換えるのがわかりやすい（つまり **Bergisel** までの直通はない、ということ）、と教わる。はなはだ乱暴だが、インスブルック西駅のあたりまでくれば、やはり道行く市民に質問をすれば、トラムの駅とはいえ折り返しの始発・終着駅で目立つので、たどり着ける。

ベルクイーゼルの駅を見つければ、あとは遊園地の乗り物のような電車に乗ってイグルスまで山の景色を楽しめばいい。

イグルスの駅からは、乗ってきた電車の線路に沿ってのんびりした未舗装路が続いている。詩のタイトルになったランスまで、丁度いい距離のハイキングコースである（★写真17）。適当に道をそれても、見晴らしのいい野の道がつながっているし、遠くに見えるノルトケッテの山々が目印になるので道に迷うこともない。

ランスには小さな湖があり、夏場は水浴をする人たちのために海の家のような小屋が並び、家族連れや若者でごった返していた。たまたま猛烈な熱波が来て 40 度近い気温だったこともあるだろう。だが、3 月の訪問時には人の気配はなく、まさしくトラークルの詩の世界であった（★写真18）。